

## 盛岡市の子どもの自然・社会体験は増えているのか — 小中学校児童生徒の比較を通して —

### **Are Nature and Social Experiences of Children in Morioka City Increasing?**

#### **— A Comparison of Elementary and Junior High School Students —**

渡部 芳栄 (高等教育推進センター)

#### Abstract

This paper reports the results of a survey conducted at elementary and junior high schools in Morioka City, Iwate prefecture, with emphasis on the differences between elementary and junior high school students. The survey was conducted from December 2017 to January 2018 among students from the 5th grade in 11 elementary schools and the 2nd grade in 6 junior high schools in Morioka City, Iwate prefecture. The scope of the survey included how students spend their time after returning home from school on weekdays, the amount of interaction with nature and society, as well as their own dispositions, abilities, mindsets, etc.

The results are as follows. Firstly, the majority of students spend their time with their mothers after going home on weekdays, and they often study and watch television. However, around 48% of the elementary students play with their friends outdoors every day or occasionally, whereas only 26% of junior high school students engage in the same activities.

Secondly, experiences such as "watching out for bullies," "caring for flowers," "caring for pets," and "participating in local festivals" are more common among elementary school students than junior high school students.

Thirdly, experiences such as active interaction with nature ("fishing at the sea or river," "swimming in the sea or river," "drinking from springs"), "role-playing," "playing games such as kick-the-can," "sumo wrestling," "playing with children living next door," and "being scolded by neighbors" decline in the higher grades. Activities involving their peers also decline over a span of just 3 years.

Moving forward, the task is to illuminate the kind of changes in the students' disposition and abilities as a result of changes in their interaction with nature and society.

キーワード：盛岡市，児童・生徒，自然体験，社会体験

#### 1. 背景

2014年からの地方創生政策は，特に岩手県のような人口流出が激しい地方の県に，大きなインパクトをもたらしている。2014年5月8日に日本創成会議・人口減少問題検討分

科会が出した「成長を続ける21世紀のために「ストップ少子化・地方元気戦略」」（増田レポート）では、「地方と都市の間を人が移動する機会は、「大学等への入学」,「最初の就職」,「40代ごろの転職・再出発」,「定年」の4つがあるとされている」としていることもあり、高校卒業時（大学等進学時）及び大学卒業時にいかに若者を東京に流出させないかということが、その後の地方創生政策の柱の1つとなっている。

しかし、若者の流出を食い止めたとしても、地方の若者が高校卒業時まで、どのような経験をし、どのような資質・能力を身につけているのかが本来重要ではないだろうか。必ずしも適切な表現ではないが、各種の体験が乏しく、地域への関心（決して愛着という意味とは限らない）もないままに成長しても、その個人や地方に対して、「地方創生」を考える上でどのような意味があるのかは、検討の余地があるだろう。

実際、体験と体験の力の関係性に着目した国立青少年教育振興機構編（2010）では、年代が若くなるほど、自然体験・遊びが減る傾向があることや、幼少～中学生期の体験が多い高校生は思いやり、やる気、人間関係能力等が高いこと、小学校低学年では友達・動植物とのかかわり、高学年～中学生は地域・家族とのかかわりが重要であることなど、興味深い調査・分析結果を提示している。また、国立青少年教育振興機構編（2016など）では、自然・生活体験が豊富な子は自己肯定感や道徳観などが高くなる傾向や、自然体験は1998年の調査開始以降一旦減少し、近年は再度増加傾向にあることなどが分かっている。

本稿では、地方創生を考える上で、子どもたちの自然・社会体験が重要であるという仮説を持ち、岩手県盛岡市の小中学校を対象にして行ったアンケートについて、小中学校の児童生徒の差に着目しながら、その結果の概要を報告する。

## 2. 調査の概要

岩手県盛岡市内の17小中学校（小学校5年生、中学校2年生）を対象に、アンケート調査を行った（対象児童生徒数1,152、回収数1,103、回収率95.7%）。盛岡市内の子どもたちを母集団と想定しつつも、対象の選定にあたっては盛岡市教育委員会と意見交換をしながら、地域的・歴史的背景などから6中学校区（6中学校・11小学校）を選定している。

アンケートは独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（2009年実施）を土台にしつつ、適宜変更を加えて実施した。アンケート調査項目の概要は以下のとおりであるが、本報告では主に問2・問3の結果を報告する。

問1：属性について

問2：平日帰宅後の過ごし方について

問3：過去・現在の自然体験・社会体験の度合いについて

問4：現在身につけている能力や考えについて

問5：これまで学校以外で一番楽しかったことについて（自由記述）

問6：インタビュー調査の可否について

なお、問3の自然・社会体験の内容については、下記のように省略して標記している。

質問文	本稿中表記
海や川で貝を採ったり，魚を釣ったりしたこと	海川釣り等
海や川で泳いだこと	海川泳ぎ
太陽が昇るところや沈むところを見たこと	太陽観測
夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと	星空観測
湧き水や川の水を飲んだこと	湧き水飲み
米や野菜などを栽培したこと	米野菜栽培
花を育てたこと	花育て
ペットなどの生き物の世話をしたこと	ペット世話
チョウやトンボ，バッタなどの昆虫をつかまえたこと	昆虫採取
野鳥を見たり，鳴く声を聞いたこと	野鳥観察
かくれんぼや缶けりをしたこと	缶けり等
ままごとやヒーローごっこをしたこと	ままごと等
すもうやおしくらまんじゅうをしたこと	すもう等
友人とケンカしたこと	ケンカ
弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと	いじめ等注意
近所の小さい子どもと遊んであげたこと	近所児童遊び
近所の人に叱られたこと	近所叱られ
バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと	席ゆずり
地域の祭りに参加したこと	地域祭り
地域清掃に参加したこと	地域清掃

### 3. 普段の生活について

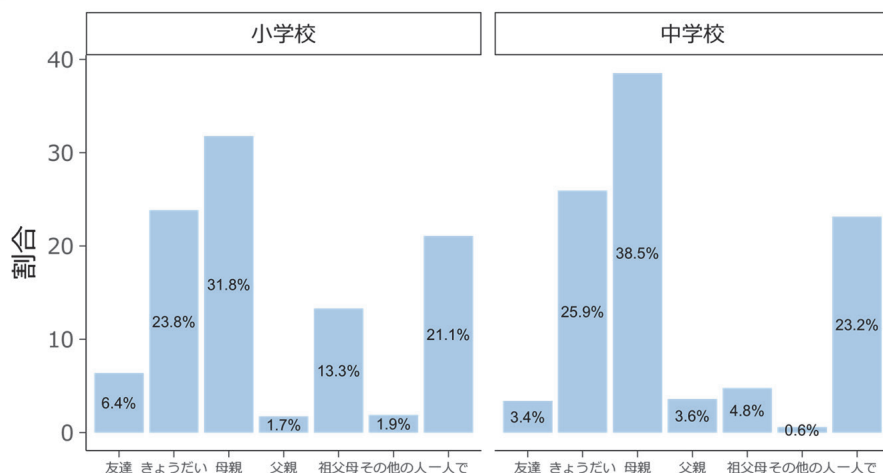


図1 平日帰宅直後，過ごす人（最も多い人）

全体としては35%ほどが、平日帰宅直後に母親と過ごしていると回答しているが、中学校のほうでやや多い。きょうだいと過ごす子も25%程度いるが、1人で過ごす子も2割強存在している。次いで多いのが祖父母であるが、小学校でやや多い。

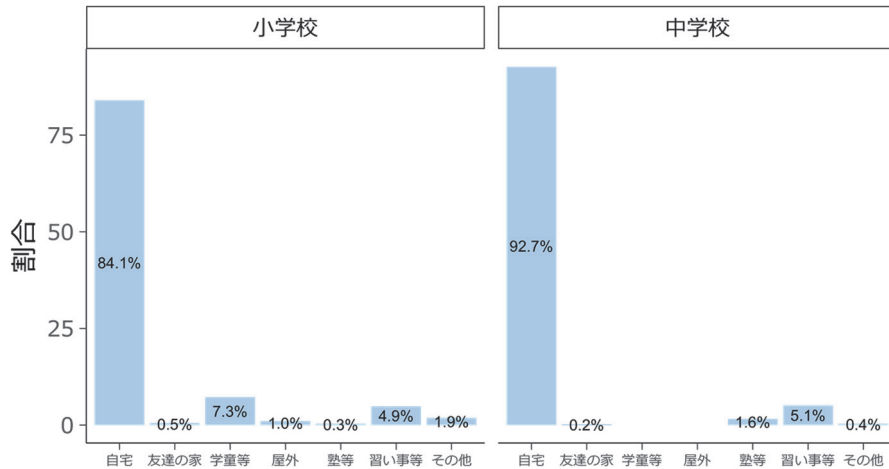


図2 平日帰宅直後、過ごす場所（最も多い場所）

平日帰宅後に過ごす場所（図2）については、全体で9割程度の子どもたちが自宅と答えており、自宅以外の場所がメインという子は多くないようである。次いで多いのは習い事等の場所（5%程度）、その他、小学校では学童等も多い。

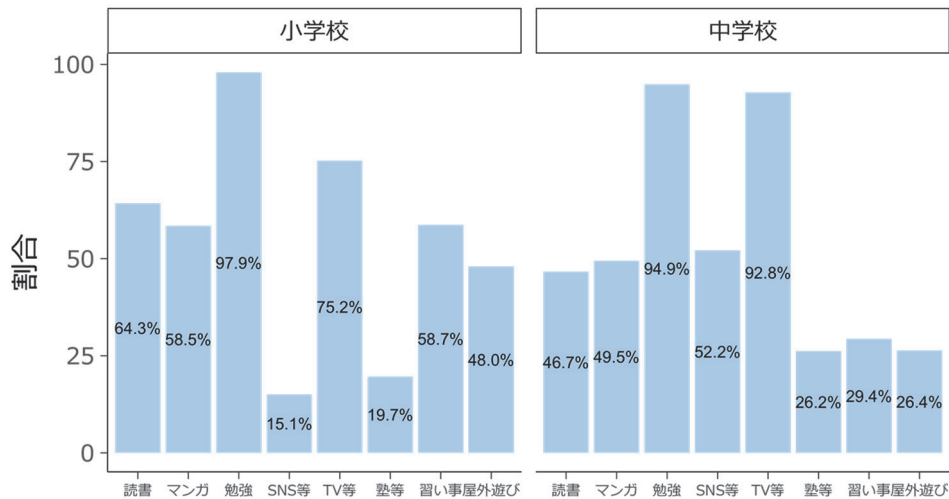


図3 平日帰宅後にすること

平日帰宅後にすること（図3）については、小中学校ともに高いのは勉強であり、宿題の類が毎日のように出ていることが予想される。次いで高いのがTV等(TV、動画、ゲーム)であるが、小学校よりも中学校のほうが高い。読書・マンガは半数近い値を示しているが、小学校のほうが高い。SNSについては、小学校ではスマートフォンなどの情報機器を持っていないからか、15.1%にとどまっているのに対し、中学校では過半数である。塾等については、2割程度であるが、中学校のほうが若干高い。習い事や外遊びについては小学校のほうが高く出ている。

#### 4. 自然・社会体験について

図4～図6は、20項目の自然・社会体験について、4つの時期（小学校入学前、小学校低学年時、小学校高学年時、中学校時）別に、「何度もある」「少しある」と回答した割合を示したものである。本稿では、小中学校の比較に着目するため、中学校時の結果は割愛する。

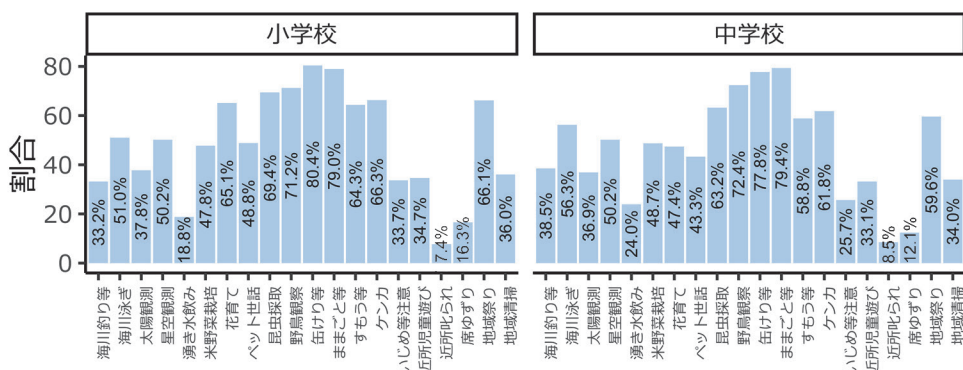


図4 小学校入学前の体験の度合い

小学校入学前には、「缶蹴り等」「ままごと等」「野鳥観察」などが7割～8割と高く、次いで「昆虫採集」「すもう等」「ケンカ」「地域祭り」も多く、おおむね6割以上である。それ以外となると、半数程度あるいは半数に満たず、近所の人に叱られたり、バス等で席をゆずるという経験は、まだほとんどできていない。

小中学校の差を見ると、「花育て」「いじめ等注意」「地域祭り」「昆虫採取」「すもう等」「ペット世話」などは小学校児童の方が5ポイント以上高い一方、「海川釣り等」「海川泳ぎ」「湧き水飲み」などは中学校生徒の方が5ポイント以上高かった。

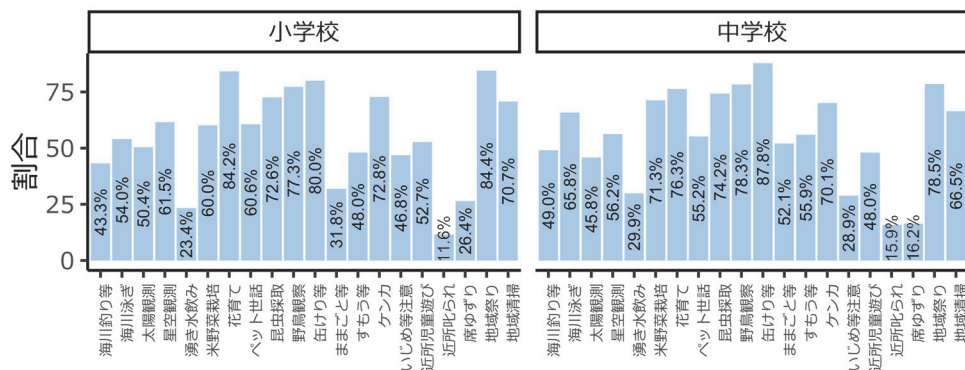


図5 小学校低学年時の体験の割合

小学校低学年時には、「野鳥観察」「缶蹴り等」「ままごと等」「昆虫採集」「地域祭り」などが多い一方、近所の人に叱られるような経験はほとんどないままである。

小中学校の差を見ると、「いじめ等注意」「席ゆすり」「花育て」「地域祭り」「ペット世話」「星空観測」で5ポイント以上高いのに対し、「ままごと等」「海川泳ぎ」「米野菜栽培」「すもう等」「缶けり等」「湧き水飲み」「海川釣り等」などは5ポイント以上低い。

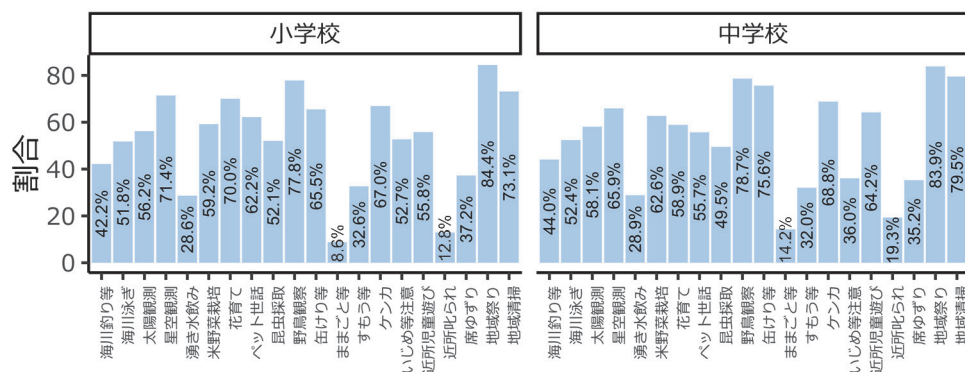


図6 小学校高学年時の体験の割合

小学校高学年時には、最も多いのが「地域祭り」となり、「地域清掃や」「野鳥観察」なども高い。一方「ままごと等」はかなり低くなっている。

小中学校の差を見ると、「いじめ等注意」「花育て」「ペット世話」「星空観測」などは5ポイント以上高いのに対し、「缶けり等」「近所児童遊び」「近所叱られ」「地域清掃」「ままごと等」は5ポイント以上低い。



## 5. 考察と今後の課題について

地方創生を考える上で、子どもたちの自然・社会体験が重要であるという仮説を持ち、盛岡市の小中学校児童生徒を対象に実施したアンケート調査結果について、主に小中学校の児童生徒の回答傾向の比較をしながら分析を行った。

分析結果から考察すれば、以下のようなことが言える。第1に、平日帰宅後は、母親と自宅で過ごすパターンが最も多く、地域に出て、屋外で、友人と遊ぶような経験をメインとはしていないようである。ただし、最も多いわけではないだけであり、習い事や塾などでの友人もいるかもしれないし、特に中学校では、部活を通して友人とともに過ごしている可能性は大いにある。それでも、屋外での遊びを「毎日」「時々」していると回答した小学校児童は48%ほどであり、逆に言えば過半数の児童はあまり、あるいはほとんど外遊びをしていないことになる。

第2に、たった3年の違いではあるが、中学校2年生と小学校5年生の自然・社会体験を比較すると、各時期においても、小学校5年生のほうが中学校2年生よりも増えている体験がある。どの時期でも増えているのが「いじめ等注意」で、しかも、かなり大きく増えている。いじめが社会問題となり、家庭でも学校でも、いじめ対策が取られ始めた時期なのかもしれない。また、「花育て」や「ペット世話」も大きく増えているが、これも世の中の動きと関連があるのかどうかは分からないが、家庭や学校で、生き物と触れ合う機会を増やしているのかもしれない。また「地域祭り」も増えているが、地域に関心を持っているのか、あるいは、学校等で地域祭りに参加する仕掛けを作っているのかまでは、今回の分析では不明である。

第3に、同じくたった3年の違いではあるが、中学校2年生と小学校5年生の自然・社会体験を比較すると、各時期においても、小学校5年生のほうが中学校2年生よりも減っている体験がある。3時期ともに低下しているものはないが、入学前や低学年時にはアクティブな自然体験（「海川釣り等」「海川泳ぎ」「湧き水飲み」）が低下していた。他の経験を増やしているため、相対的に減っているという見方もできるが、もしかしたら無理せずできる体験に流れているということも考えられる。小学校入学後には、「ままごと等」「缶けり等」が大きく減少しており、また低学年では「すもう等」、高学年では「近所児童遊び」「近所叱られ」も減少していた。多人数でできる遊び（と、その結果叱られること）について、たった3年の間で減少していることがうかがえる。

以上のことから、家庭や学校で各種体験を積ませる工夫らしきものも見られるものの、その一方で、それ以外の自主的な仲間集団でできる遊びが減少しているようにも見える。

小中学校とも同一学区の子どもたちを調査しているものの、対象は厳密には違う（縦断データではない）ことに加え、盛岡市の子どもたち全員に当てはまるかは不明である。また、全国や他の地域の子どもたちと比較するとどうか、さらには、自然・社会体験の変化の結果、資質・能力等にどのような変化があったかが重要である。これらに関する詳細な分析は、今後の課題である。

## 付 記

本研究は、平成29年度日本子ども社会学会奨励研究基金（研究代表者：渡部芳栄，研究分担者：白旗希実子・石井美和，研究課題名：地域社会におけるキャリア発達に関する研究）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 独立行政法人国立青少年教育振興機構編，2010，『「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書』。  
独立行政法人国立青少年教育振興機構編，『青少年の体験活動等に関する実態調査』各年度報告書。  
深谷昌志・深谷和子・高旗正人編，2006，『いま，子どもの放課後はどうなっているのか』北大路書房。  
門脇厚司，1999，『子どもの社会力』岩波新書。  
門脇厚司，2010，『社会力を育てる』岩波新書。  
日本子ども社会学会編，1999，『いま，子ども社会に何がおこっているか』北大路書房。  
日本創成会議・人口減少問題検討分科会，2014，「成長を続ける21世紀のために「ストップ少子化・地方元気戦略」」(<http://www.policycouncil.jp/pdf/prop03/prop03.pdf>) (最終アクセス:2019年05月21日)  
住田正樹，2001，『地域社会と教育』九州大学出版会。  
住田正樹，2014，『子ども社会学の現在』九州大学出版会。  
住田正樹・高島秀樹編著，2015，『変動社会と子どもの発達—教育社会学入門』北樹出版。  
住田正樹・武内清・永井聖二編，2010，『子どもと地域社会』学文社。  
生涯学習審議会，1999，「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ（答申）」。